婚活前（シーン２）

結美「あー。終わったー。」

　結美は、お面をとって、伸びをしながら、光輝に話しかけた。光輝がこちらを向いて、笑顔で答えた。

光輝「お疲れさま。今日は、かなり調子良かったな。」

結美「ありがと。」

光輝「この『桜の木の伝説』も、人形師の物語だけど、結美のような人形を操っていたのかな。」

結美「この人形劇、代々、伝わってるらしいよ。私は、小さい頃、おじいちゃんから教わったし。人形も、おじいちゃんから貰った。」

光輝「へえ。それはそうと、今度の日曜日空いてる？今回頑張ったし、公演の打ち上げしようぜ。」

結美「あー。その日は駄目。もう予定入ってる。」

光輝「何の予定？」

結美「婚活イベントがあるの。」

光輝「また、婚活？今回で何回目よ。」

　光輝の顔が少し呆れたような感じになった。結美は気にせずに続けた。

結美「次で、１０回目ね。」

光輝「良くやるなあ。」

結美「今度こそは、必ず、理想の人をゲットするの。」

光輝「理想って。どんな人が理想なんだよ？」

結美「年収１０００万で、背が高くて、優しい人。」

光輝「そんなやついるのか？」

結美「いるわよ。どこかに。そういう光輝はどうなのよ。香純さんとは上手くいってるの？」

光輝「あー。今度、実家に行くつもり。」

結美「はー。なに、それ。結婚するの？もう、ゴールイン？」

光輝「結婚ってゴールなのかよ？」

　結美にツッコミを入れた後、光輝の顔が少し曇った。

光輝「まあ、上手くいくといいんだけど。」

結美「良いなあ。私も、良い人がいれば。」

光輝「ただ、相手の家の親が、家柄とかにこだわる感

じなんだよな。」
結美「そっかあ。香純さんってお嬢様って感じだもんねえ。」
光輝「あいつのそういうところが好きなんだけどな。」
結美「あー。熱い、熱い。ごちそうさまでした。」
光輝「茶化すなよ。結構、緊張してるんだよ。」
結美「らしくない！駄目だったら、私と結婚する？」
光輝「年収１０００万なんて無いぞ。」
結美「じゃあ、駄目ね。もっと稼いで！まあ、上手くいくことを祈ってるわ。」
光輝「サンキュ。」
　結美は、光輝なら香純の家に行っても大丈夫なんじゃないかなと思いつつ、それでも上手くいくように願いながら、光輝と別れた。